韓国青山島における棚田と観光

劉鶴烈

はじめに

この頃、都市民が農業･農村をみる観点と認識が変わりつつある。とくに、農業･農村が持っている多面的･公益的な機能に関心が高まっている。また、余暇時間の増大、余暇形態の変化などにより都市民が農村地域に旅する傾向も急増している。今までの農村地域での観光[i]といえば、農村生活体験、農業体験、郷土料理つくりなど単純な一回性体験や何かを作る形が主であった。しかし、最近、農村地域で昔から継承してきた地域文化、芸能および農業生産活動により自然に形成された景観に都市民の関心が高まり始まっている。

農村地域には、地域固有の自然、歴史、文化、芸能、景観など多様な観光資源が存在し、その一つが棚田である。しかし、韓国では未だに棚田に対する関心と価値評価はそれほど高くない。農村地域住民はもちろん都市民も棚田が持っている多様な価値について十分に評価、認識していないのが現実である。

本稿では、韓国の南に位置する青山島の棚田（グドゥルジャン田 ）を事例に挙げて青山島の観光資源現況、観光客の特長および青山島棚田の観光資源としての価値などを整理したうえで、青山島の棚田が持っている固有の特徴を活かし、観光活性化に繋げていくための基本戦略と課題について述べることにした。

一.　調査対象地域の概要

青山島は、韓国の南部地方である全羅南道[ii]莞島郡[iii]に属する島である。1981年に海上国立公園に指定、2007年に国際Slow Cityに指定された。そして、2013年には青山島の棚田が韓国農漁業遺産[iv]に指定されるなど自然環境に恵まれた地域である。また、2010年には青山島のなか棚田が多く分布している‘サンソ里（集落）’が、自然生態の多様性が認められて政府より自然生態集落として指定された。

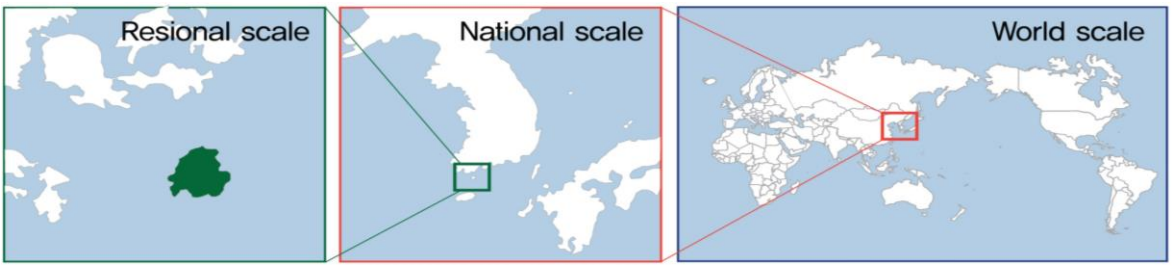

図1. 青山島の位置図

島の面積は、約43㎢で日本新潟県佐渡の1/20程度の小さいな島である。人口は、2001年に3,293人であったが、年々減って2010年には約2,200名まで減少した。65歳以上の高齢者比率も40%で非常に高い。

表1. 青山島の人口推移

年度	2001年	2003年	2005年	2007年	2009年	2010
人口	3,293	3,090	2,800	2,667	2,591	2,271
世帯数	1,433	1,413	1,354	1,354	1,346	1,177

青山島の土地利用状況をみると、林野が全面積の72.5%を占め最も広い。次に水田が12.3%、畑が8.8%順で島でありながら典型的な農山村地域のような土地利用がみられる。

二.　　青山島の棚田の特徴

グドゥルジャンとグドゥルジャン田の概念

青山島の棚田は他の地域の棚田とは異なる物理的構造など独特な特徴を持っている。韓国の伝統的床下暖房であるオンドル（温突：写真1）の構造を応用して築したことで現地では‘グドゥルジャン田’と呼ばれている。

グドゥルジャンとは、韓国の伝統的床下暖房であるオンドルに使われた薄くて平たい形の石のことをいう。一度暖めた熱が長く持ちつける雲母という石がよく使用された。後で述べるグドゥルジャン田の構造がオンドルシステム構造と同様であることでグドゥルジャン田と呼ばれるようになった（写真2）。

写真 1.オンドル

写真 2.グドゥルジャン田

グドゥルジャン田と一般棚田との比較

一般的な棚田とグドゥルジャン田を比較してみると、共通点として挙げられるのは、外観的形態と天水田ということである。しかし、田んぼの物理的構造、内部構造などではかなり異なっている。

一般的棚田とグドゥルジャン田との違い点を整理すると次のようである（表2）。

一つは、一般的な棚田は、韓国の内陸地域や南部海岸地域に分布しているが、グドゥルジャン田の場合、未だに青山島以外の地域では見当たらない青山島固有のモノである。

二つは、一般的棚田は地表面に用排水路が設けてしるし、田んぼの基礎部分が土と砂利（小石）が混じて築造されているが、グドゥルジャン田の場合、用排水路と代わって通水路[v]が存在する（写真3、図2）。通水路の有無が一般的棚田とグドゥルジャン田との違いを説明してくれる。また、グドゥルジャン田 の基礎部分が、石（グドゥルジャン）で築造されていることも一般的な棚田と異なる点である

三つは、田んぼの内部の構造と材料の違いである。一般的棚田の場合、田んぼの内部は殆ど土で普通の田んぼと違いがない。しかし、グドゥルジャン田の内部は石で造られた柱があり、その柱と柱の間にグドゥルジャンという石を乗り上げた構造（オンドル構造）が見られる。なお、材料も土よりは石（グドゥルジャン）が多く使用されている。

写真 3.通水路

表2. 一般的棚田とグドゥルジャン田との比較

区分	一般的棚田	グドゥルジャン田
分布	智異山一帯、慶尚南道一部 南部海岸地域一部 内陸山間地域一部	青山島のみ分布
分布地域 特徴	山沿い、傾斜地	山沿い、傾斜地 水が多い（湧出水が多い）
外形的形態	階段式田んぼ 地表面に用排水路位置 田んぼの基礎部分：土＋石	階段式田んぼ 通水路存在 田んぼの基礎部分：殆ど石
内部構造	特別な構造物なし 材料：殆ど土	オンドル構造 材料：殆どグドゥルジャン

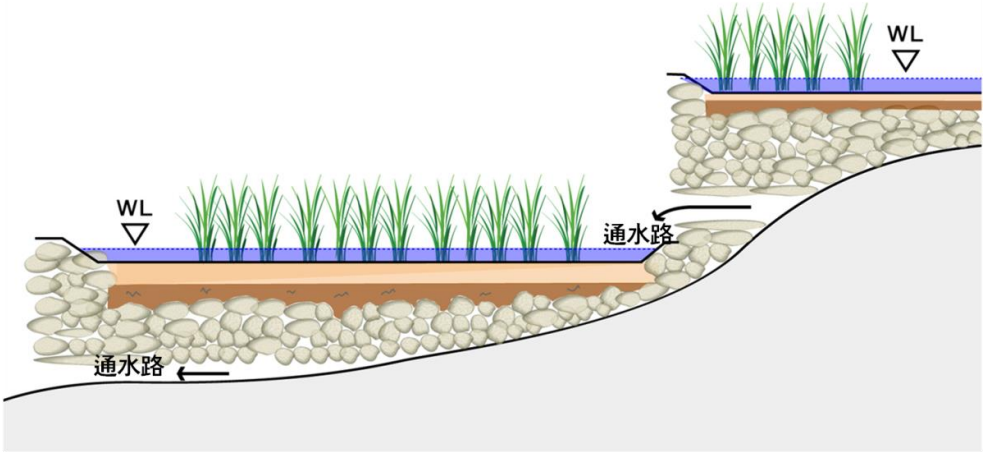

図2. グドゥルジャン田の模式図

グドゥルジャン田の特徴

グドゥルジャン田の特徴を整理すると、一つは、グドゥルジャン田は、青山島しかみられない独創的な農業構造物である。現在まで報告された研究を調べると、他の地域（国）では見つからない希少性を持っていると評価している。二つは、韓国の伝統的な農業土木および農業用水管理技術が適用された田んぼである。田んぼの上下部にある通水路は水の選択的な利用（水田か畑を選択）できる。これは先人が先進化した農業用水管理技術を持ってたという意味になる。また、グドゥルジャン田と通水路を造る技術は、伝統農業土木学側面からも重要な価値がある。三つは、韓国の伝統的床暖房システムであるオンドル文化と農業土木技術の営農文化が融合した韓国固有の伝統文化的な価値を持っていることである。四つは、グドゥルジャン田は周辺集落の石垣、森林などと調和し、地域固有の優れた農村景観を形成させてくれたこともグドゥルジャン田持つ価値であるといえる。

三.　　青山島の観光現況

青山島の観光資源と特徴

青山島は海上国立公園に指定されたように多様な観光資源を保有している（写真3~6）。自然観光資源としては綺麗な海岸、山、海水浴場などがあり、独特な島ならではの資源を持っている。農業観光資源としては、島の中央部に広がっている棚田（グドゥルジャン田）と伝統的な農法がある。そして、民俗観光資源としては、この島だけ継承されてきた民謡、方言、葬式、豊魚祭、伝統漁法などが豊富である。また、青山島スロー散策路、支石墓、石垣、海女などこの地域ならではの歴史、文化資源を保有している。

とくに、 青山島スロー散策路は、最も観光客から評判が良い観光資源である。青山島スロー散策路の歴史は16世紀までさかのぼる。この散策路は16世紀に青山島に人々が定着してから自然発生的に造られるようになった。スロー散策路という名は2007年にアジアSlow Cityに指定されたからであるが、以前から地域住民が村と村を移動する生活のための道であった。現在は地形的、景観的特性を活かした17の散策路が調整され観光資源として活用されている。17の散策路の中、幾つは棚田（グドゥルジャン田）の畦道が含まれているように棚田も青山島の観光資源の重要な要素である。

もう一つ、有名な観光資源として石塀道が挙げられる。青山島の殆どの集落には石で積んだ石垣があり、それが自然に石垣道になった。集落周辺に広がっている棚田の石畦と調和し素晴らしい農村景観を造られている。集落の石垣は伝統的な形が比較的良く保存されており国家指定文化財として指定された集落もある。

写真 4. 海岸景観

写真 5. 映画撮影地

写真 6. 石垣

写真 7. 海水浴場

青山島の観光客推移と特徴

2005年以後青山島を訪ねる観光客は、年々増加している。とくに、2007年Slow Cityに指定されてからは急激に増えつつある。2007年に年間観光客が約92,000名であったが、2011年には3倍以上増え約320,000名まで至った。花見シーズンである4月～5月と夏休暇シーズンである7月～8月に集中している。観光客の年齢層を調べると4～50代が全体の5割を超えてる。家族単位よりは団体旅行パターンが多いのも特徴である。

表3. 青山島の観光客推移

年度	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年
観光客数	76,304	72,026	88,703	126,250	199,912	320,000

観光客が増えることによって青山島の経済、社会に少なくない変化が現している。宿泊業、運送業、飲食業などの3次産業に良い影響を及ばしているが、その反面、観光客のゴミ、騒音、景観破壊などの社会的問題も出ている。

青山島に尋ねる観光客の観光パターンを調べると[vi]、滞在期間は日帰りが26.8%で最も多かったが、1泊以上宿泊しながら滞在する比率が約73%である。青山島で人気ある観光地（施設）としては、映画撮影地（63.5%）、海水浴場（26.8%）、虎岩（19.0%）順であった。また、観光後、最も印象に残るモノ（コト）としては、綺麗な海岸景観（44.5%）、映画撮影地（16.0%）、釣り（7.5%）順になった。

これらの結果からみろと、青山島には優れた自然資源、生態資源、文化資源など豊富な観光資源がありながら、一定の資源に偏ってる傾向がみられる。また、青山島のグドゥルジャン田に対する観光客の認識度がかなり低い。未だに、観光資源としてその価値が発揮していないことだといえる。青山島の住民が今後この問題をいかに解けているのかが課題である。

現在、青山島の独特な棚田であるグドゥルジャン田をテーマにした観光プログラムは多くない。

2011年青山島ヤンジ里に‘グドゥルジャン田体験場’が造成されてグドゥルジャン田の構造がみられる展示物、グドゥルジャン田の農業体験およびグドゥルジャン田を造る簡易体験施設などが設けられている。グドゥルジャン田の体験プログラムには、家族単位の都市民を招待し、かかし（傀儡）作り、収穫祭、オーナ制度、グドゥルジャン田の復元活動などがある。

四.　　青山島の棚田を生かした観光戦略

地域住民と都市民にグドゥルジャン田の観光的価値認識拡大

前述したように青山島のグドゥルジャン田には、観光資源としての様々な価値と魅力が潜在している。こうした価値と魅力を表に出させるためには、まず、青山島の地域住民が青山島のグドゥルジャン田に対する認識を変えるべきである。グドゥルジャン田が唯のお米を生産する空間に過ぎないという今までの思い込みから穀物の生産機能以外に多面的な機能と観光機能まで発揮できる重要な地域資源であるという認識が必要である。また、地域住民だけではなく青山島に尋ねる観光客（都市民）にもグドゥルジャン田の魅力を持たさせる具体的な方策を模索しないといけない。このためには、行政をはじめて専門家グループによりグドゥルジャン田の価値や観光魅力に関する住民教育および学術セミナーなどを頻繁に開けることがなにより重要である。

グドゥルジャン田の保全、継承活動を通した観光プログラム開発

長い歴史の間、地域住民に保全･継承してきた青山島のグドゥルジャン田は、これからもきちんと守っていくべきである。このためには、地域住民はもちろん観光客も青山島のグドゥルジャン田の保全･継承する活動を続けることが大事である。今のような一回性で単純な農作業体験プログラムだけでは、グドゥルジャン田の保全･継承する活動に繋げられるプログラムの企画が必要である。例えば、グドゥルジャン田の畦なおし、定期的な農作業お手伝い、オーナ制度などがあがられる。

自然生態、農業文化、農村景観を生かした農村観光推進

農村観光の重要なポイントの一つは、その地域の自然生態や農業文化などと調和した景観と農村らしさ(rurality)を維持することである。この意味で青山島のグドゥルジャン田は、厳しい自然環境のなかで、地域住民が生存のために奮闘努力しながら造られた歴史的な産物であるといえる。

青山島のグドゥルジャン田の殆どは、環境保全型農法により稲を栽培しているので田んぼの中では多様な生物種が生息している。自然観察、生物観察などの田んぼの自然生態系を活かした様々な体験と学習プログラムができる。

また、昔から伝われる農謡、芸能など農業を営むことにより自然的に生まれた農業文化も魅力的な観光資源である。青山島のグドゥルジャン田は、自然生態や地域農業文化などを上手く利活用しながら生態観光中心の農村観光を推進することが望ましい。

日本佐渡の場合、‘車田植’のような伝統農業芸能が今まで継承されて地域の重要な観光資源として利用されている（写真7）。

出所:　http://wave.ap.teacup.com/sado-tanada/122.html

写真 8.佐渡の車田植

韓国農魚業遺産、世界重要農業遺産（GIAHS）ブランド活用

世界重要農業遺産、日本の文化的景観などのような優れた地域資源は、その地域のブランド価値を高める機能を持っている。とくに地域の農業遺産が国内外的に代表性を持った場合、地域ブランド価値はもっと高める。青山島のグドゥルジャン田も韓国農漁業遺産に指定されてから青山島という地域の知名度は高まった。

実際に世界遺産に認定されによって観光客および観光収入が増えた事例は少なくない。例えば、ベトナムのホイアン（Hoi An）の場合、1999年に世界文化遺産に認定されてから2年後の2001年には観光客が約2倍以上急増した[vii]。また、日本京都府宮津市も世界文化遺産に認定されてから観光客が約20%増加したという研究結果[viii]がある。このように高まった地域ブランド価値を如何に観光活性化と結びつくかが重要である。

農業遺産が持ってる地域代表性を上手くブランディング（branding）すると、この地域で売っている観光商品及びサービスは、他の地域と比べて高くその価値（価格）を貰えることができる。下記の写真（写真8，9）は、日本佐渡が世界重要農業遺産に認定されて新しくブランド化した商品である。

写真 9. 日本佐渡弁当

写真 10. 日本佐渡お米

おわりに

今まで、青山島のグドゥルジャン田の特徴、青山島の観光現況および観光戦略について述べた。ここでは、これらの研究結果を踏まえて青山島のグドゥルジャン田が新たな観光資源として活用されるために地域住民、行政、専門家など関連主体が行うべきことについて提言する。

一つ目は、グドゥルジャン田を観光資源として活用しながらもきちんと保存していくための体制を構築することが大事である。しかし、高齢化と過疎化により耕作を放棄するグドゥルジャン田の面積が年々増えている。既に耕作放棄地になったグドゥルジャン田を復元することも重要であるが、まず、これ以上は、増やせていかないように地域住民と行政が一つになって知恵を絞る出すことが必要だ。例えば、グドゥルジャン田のオーナ制度、グドゥルジャン田の農作業お手伝い運動など都市民との交流活動を拡大していくことが一つの方策になるだろう。

二つ目は、周辺国とお互いに協力し連帯を強めていくことだ。日本、中国、韓国などアジア地域には、棚田が幅広く分布しているし、棚田を活かして観光と繋がっていく動きがみられ始まっている。とくに、日本の佐渡、能登半島、中国のハニ族棚田などが世界重要農業遺産（GIAHS）に指定されており、観光活性化に向けた多様な施策が推進されている。2013年に結成された東北アジア農業遺産研究協議会[ix]をはじめ、日本棚田学会、韓国農漁村遺産学会などが連携して、棚田の観光戦略についての学術交流、情報交換などの活動を活発に行うことを求めたい。

三つ目は、東北アジア棚田観光プログラムの開発が必要である。現在、韓国、日本、中国の三つの国の間の国際交通インフラ（航空便、船便）は十分に備えっている。一般的な観光ツアーではなく棚田地域に滞在しながらその地域の農業、文化、景観などについて教育、体験できる棚田巡礼ツアー、農業遺産ツアーのような新たな観点での観光プログラムの開発も求めたい。

---

[i] 農村地域で行われる観光に関する用語はグリーンツーリズム、ルーラルツーリズムなど多様であるが、韓国では農村観光と呼ばれている。

[ii] 韓国の行政単位体系の一つで日本の‘県’に近い。

[iii] 韓国農村部の行政区域体系は「道、郡、邑･面、里」の四階層からなっている。日本とは違い、韓国における‘郡’は、今も実質的な機能を果たしている行政単位である。

[iv] 韓国農業遺産とは、農村地域住民が長い期間、地域の環境、社会、風土などに適応しながら形成してきた有無形農業システムや現象を国家が指定し保全する制度である。2013年に導入し、現在、青山島のグドゥルジャン田と済州道の畑石塀二ヶ所が指定されている。

[v] 通水路の機能は、①用排水路の機能、②通水路による水田の選択的利用可能（水田か畑）、③水を貯水役割、④冷たい用水を通水路で回させ稲の冷害防止などがある。

[vi] Cho, Jin-Sang(Dongshin University)により2007年12月に調査した結果である。

[vii] Huynh Hoa Thuy Tien(2011), RESIDENTS PERCEPTIONS OF IMPACTS OF INTERNATIONAL TOURISTS TO COMMUNITY IN THE WORLD HERITAGE SITE OF THE ANCIENT TOWN OF HOI AN, VIETNAM

[viii] 関西大学大学院会計研究科により分析した結果

[ix] 韓国、日本、中国3カ国の農業遺産に関わっている専門家中心の協議会を2013年10月に正式に設立した。